まいろっさ

第３号

「深い信心」藤 秀悟

本尊は掛けやぶれ
聖教はよみやぶれ

『蓮如上人御一代記聞書』

本尊は紙がすり切れて破れるほど何度も繰り返し掛けなさい。聖教はすり切れて破れるほど何度も開いて繰り返し読みなさい。そして、そのようにして教えの言葉に親しみ、よく聞いていきなさい、と蓮如上人は教えています。

真宗大谷派（東本願寺）
小松大聖寺教務所

〒923-0904
小松市小馬出町26
TEL：0761-22-0555

［発行者］
小松大聖寺教務所長
保木　悦雄

［編　集］
小松大聖寺教区教化委員会

2・3面
特集 奉仕団 Hoshidan
真宗本廟奉仕団に参加して
粟津組門徒
奥容子さん
出村昌敏さん

4・5面
能登半島地震
現地の声を聴く
西山郷光さん（珠洲市西勝寺住職）
塚本眞如さん（珠洲市圓龍寺住職）

6・7面
法話のページ
函蓋相称
能美市静光寺住職
伊藤俊作さん

8面
教区からのお知らせ
聞法会のご案内など

特集
奉仕団
Hoshidan

真宗本廟奉仕団に参加して

真宗本廟奉仕は、全国から本山に集う方々が、親鸞聖人御真影のもとで親鸞聖人の教えを聞き、寝食を共にし、真宗門徒の生活を習う場です。
今年３月に、粟津小会奉仕団として参加されたお二人にご寄稿いただきました。

小松市今江町
奥　容子さん

３月下旬のまだ薄暗い早朝、粟津組門徒１９名と引率の僧侶２名の総勢２１名を乗せたバスは、一泊研修のため真宗本廟へ向かいました。十時に同朋会館に到着。山形県からの奉仕団と共に結成式に臨みましたが、これからの研修に身の引き締まる思いがしました。
　すぐに昼食となりましたが、皆で唱和する食前食後の言葉は楽しく、手作りの料理も美味しくて、滞在中はすべて完食させていただきました。午後は三班に分かれてのオリエンテーションや座談、御影堂、阿弥陀堂への参拝、記念撮影、清掃奉仕、勤行や講義などが続きました。
　同朋会館での研修は、一度訪れていて今回は二度目となります。後期高齢者でもあり、疲れて迷惑をおかけしないかと心配していたのですが、初回より余裕があり、楽しく取り組めていたことが有難く、不思議でした。
　清掃奉仕は御影堂門でした。この門は本廟に参詣される人々がくぐる門ですが、上部は非公開で入ることはできません。高く急な階段をロープ伝いに上った空間には、中央に釈迦如来、脇には弥勒菩薩、阿難尊者の三尊が静かに安置されています。私達が、親鸞聖人の御影に参詣する際には、いつもお釈迦様を頭上に門をくぐっていたのですね。
　２６００年前、お釈迦様が説かれた「法」は、過去・現在・未来の三世十方を貫く真理とお聞きしています。その御教えが、七高僧を経て、親鸞聖人、蓮如上人、そして限りなき念仏の人々によって今、この場へと届けられていることに自ずと手が合わさりました。夕事勤行の折には感話をさせていただく機会に恵まれました。「仏教の歴史に於いて、念仏された人々のお仲間に、私も入れていただいていることが有難く、誇りに思います」と申しました。夜は友人の部屋で遅くまで語り合い、心地よく眠りに就きました。
　二日目は六時起床、晨朝参拝での山形の坊守さんの法話は、日々の生活の中での仏教をお示しくださいました。朝食の席では、幸いにもその坊守さんの隣になり、法話のお礼を申し上げたところ、私の感話を覚えていてくださり嬉しいひとコマとなりました。
　講義、座談を終え、最後は諸殿の拝観でした。竹内栖鳳による障壁画の大寝殿、来賓を接待する雅びな白書院、大和絵が彩る宮御殿など、お庭を眺めながら別世界を堪能させていただきました。
　短く感じた二日間でしたが、仏教の中に深く浸ることのできた貴重なひとときでございました。

合掌

東本願寺同朋会館

小松市須天町
出村 昌敏さん

私は本年3月23日24日、一泊二日にて、粟津小会として真宗本廟奉仕団に参加してまいりました。昨年の6月にも真宗門徒講座後期教習にも参加し、本山は二度目であったため、おおよそ要領もわかり、ゆとりをもって行事をこなすことができました。

晨朝での超高速「正信偈」にも慣れ、ゆとりをもって唱和することができました。お食事当番や掃除もつつがなく終えました。

補導の若い僧侶の方々との交流も楽しく、教導の僧侶の法話も興味深かったです。ただ、今回は清掃奉仕については、ほとんどの方は御影堂門の清掃を希望し、阿弥陀堂廊下を希望したのは私を含めて4人だけで、これはかなりハードでありました。その分夕食はお腹が空いてたいへん美味しくいただきました。

私はいつも思うのですが、地元でのお参りや聞法会、そして本山での聞法や座談においては、我々門徒は、年齢性別、その職業や社会的地位、出自、貧富の差など全く関係なく、またそれらについて関心もありません。ただひとつ仏法を学び阿弥陀如来に帰依し念仏申す、その一点にのみ深く結びつく。阿弥陀如来の前においては、門徒は平等、それはこの娑婆においては得難いことだと感じています。

とくに本山においては寝食を共にし、座談においては個人的なことも話し、さらに一日の予定も終了したのち一室に集まり、ほんとうに忌憚のない話もしました。相続講についての現状、門徒会の地域割のこと、三帰依文は地元では全部読むのに本山では中間しか読まないこと、お寺との関係や勉強会の話、各町内での活動や悩み、更にはかなり理論的歴史的な話など、多岐にわたる話でおおいに盛り上がりました。私の門徒仲間の友人が言う「京都の夜」は忘れられないものとなりました。それは帰りのバスの中でも続き充実した二日間でした。

そういう門徒同士、また僧侶との交流と学びの刺激の「場」としての本山は貴重なものと思います。まだ参加されてない方は、ぜひ一泊もしくは二泊の真宗本廟奉仕団への参加を強くお勧めしたいと思います。

合掌

御影堂門

真宗本廟奉仕 申し込みについて

【団体】１団体は５名以上。
【個人】４名以下は個人受付。
※個人申し込みが５名に満たない時は中止となる場合があります。
【日程】１泊２日、２泊３日が基本日程。
【問い合わせ・申し込み先】研修部（同朋会館）
Tel 075-371-9185 Fax 075-371-9201
E-mail dobokaikan@higashihonganji.or.jp

能登半島地震

現地の声を聴く

３月６日、教務所および教務支所において「現地の声を聴く会」が開催されました。珠洲市から南加賀に避難されていた二人のお寺の住職にお話していただきました。

珠洲市西勝寺住職 西山郷光（にしやまさとみつ）さん

西山さんは一昨年の10月まで小松教区の駐在教導として勤めていたこともあり、馴染みの方も多くいると思います。家族の安全確認のため、住まいとしている庫裡を移動しようにも揺れがひどくて、立っていることも難しく、そのうち柱が大きく揺れ壁が崩れて、ありえないところから光が入ってくるなど、発災時の様子を生々しくお話しされました。

「250年以上経つ本堂は、完全に倒壊してしまいました。幸い、本尊や仏具などのお荘厳（しょうごん）は前年の５月５日に発生した震度５強の地震で大規模半壊に認定された際に庫裡に移動してあったので無事でした。

珠洲市の現状は、お預かりしている門徒さんの若い方々を中心に金沢市など地元を離れているケースが多く、二次避難などで珠洲を離れている人には、ハガキなどで消息を確かめているところです。

また、珠洲市内のご門徒宅には被害が大きくて仏事を行うことが難しい家も多いことから、庫裡で比較的被害が少なかったところを仮本堂に整え、お参りの要望に応えています。

長年、門徒と共に手を合わせてきた本堂が無くなることは大変申し訳なく悔しいことですが、何年か先に人が戻ってきてから、ご門徒と一緒にこれからの本堂についてお話が出来ればいいなと考えています。

復興に向けて展望を持ち、できることを取り組んでいますが、いつまでこんな生活が続くのか不安になることもあります」と。

西山さんが最後に語られた「今はこの現実実が普通なんです」という言葉がとても印象に残りました。

●未来に向かう命の頼もしさ

西山さんは４月から富山教区駐在教導（高岡教務支所付）の仕事に就き、珠洲市と行き来しています。

５月に片づけに戻った時に、子どもたちが倒壊した本堂を背に境内で元気に遊んでいる姿を見て、未来に向かう命の頼もしさを感じ、励まされたそうです。

珠洲市圓龍寺住職 塚本眞如（つかもとまこと）さん

３年前に悪性リンパ腫を患い治療をしている中、すでに涙声で、年をとると涙っぽくなってお話の途中に涙を流すかもしれません、と断ったうえで話し始められました。

●生きていることの境界

最近ではマスコミでも言わなくなりましたが、かつては太平洋側に対して日本海側を裏日本、石川県においても加賀に対して能登、能登地方も富山県側の内浦に対して私の住む高屋地区は外浦という格差をずっと感じてきました。

地震の時、最初の揺れで私はなぜかすぐに本堂へ行って無事を確かめました。２度目の揺れではもう立っていることもできないほどで、庫裡が倒壊してしまいました。その間に妻は足にがれきが乗った状態になって、私が座っていた場所は完全に崩れて、もし本堂へ行かなければ死んでいたと思います。

私の寺がある地区から輪島の方に行くと大谷地区という所があって、そこのお寺さんの55歳の住職は、本堂へ行ってそこで土砂崩れに遭って亡くなってしまいました。運命とか↖

そういうことでなくて、生きていることの境界(さかい)はどこにあるのでしょうか。

20数年前、私たちの地区は75戸あったのが現在は50戸になりました。その中には、真宗門徒もいれば禅宗や創価学会の人もいる。

1月の震災で連絡道路が寸断され、2日後には携帯電話が通じなくなって、完全に孤立状態になりました。そんな中みんなが各自家から食料を持ち寄って車中泊などで和気あいあいと過ごすことができました。私たちの地域はそんな優しい人たちの町です。そのうち地図にも載らないような農道を使い支援の食料も手に入るようなり、1月12日に加賀市の旅館に二次避難するまで過ごしました。

●原発建設計画の中で

高屋地区は１９７５年に関西電力が１００万ｋｗの原発５基の建設計画を起ち上げた場所です。中部電力が寺家地区に同じく５基のあわせて１０００万ｋｗの原発の建設が持ち上がりました。

当時、原発の知識が全くありませんでした。だから、原発に関する本を読みあさりました。賛成も反対に関する本もです。20歳半ばから10年ほど、本山の同朋会館の嘱託補導という役目をしていまして、1年のうちの60日ほど京都へ行きました。その途中、原発のある敦賀や美浜・高浜へ行きなるべく多くの方からお話を聞く機会をつくりました。

ある妊婦さんは「お腹の子に障害がないか心配で仕方ない」や、原発の仕事で亡くなる方があってその地区では「原発に子どもを取られた」と言うんだ、という話を聞いているうちに、人間と原発は決して共存できないことがわかりました。

また、私の父親は法律学者で、父から「強いものの味方をしたら坊主でないぞ」と「右か左か迷ったら、難しい方へ行け」という二つのことを教えられました。

そういうことから意図したわけではないのですが、いつしか建設反対派のリーダーと呼ばれるようになっていきました。寺が反対派の集まれる場所ということもあったのでしょう。

●あのお寺が誇り

最初は地区のほとんどが反対でした。そこへ電力会社の切り崩しが始まります。私の所へ、大手建設会社が説得に来ました。何を言ったかというと「ばーんと立派なお寺と庫裡を建ててあげる」「税金のかからないお金を差し上げます」と。それで私は尋ねるわけです。「あんたの言う立派なお寺とはどんなお寺を言うのや？」と。

私は、金ピカではないし決して大きなお堂ではないけどあのお寺が誇りです。門徒さんに負担をかけずにいじめないでいられるお寺に。金ピカのお寺にしたいなんて少しも思っていない。

結局、高屋地区で建設反対は13軒だけになりました。その後２００３年に電力会社は建設を凍結しました。

姪の父親は当時、建設会社を営んでいて、推進派でした。東日本震災の原発事故の後、彼女が「あのときは何も知らなくて(建設に)賛成をしてごめんなさい」と涙声で謝りに来てくれました。原発の建設計画とは地域の分断を生み出します。幸い高屋地区は凍結後、分断も解消していきました。

●人間とは悲しいもの

今回の地震で、庫裡と本堂は使い物にならなくなりました。門徒さんに叱られるかもしれませんが、これを維持しなくていい。もう門徒さんに負担をかけなくてほっとしています。やっと肩の荷が下ろせます。

東日本の震災の時、能登教区では一ヵ寺３万円の義援金が割り当てられました。そのとき被災者と心を共有とよく言われ協力しました。けれども実は決して共有することはできていませんでした。能登の震災で初めて東日本の人たちの辛さがわかりました。

人間とはそういう意味で悲しいものです。親鸞聖人はそのことをよーく解っていて「みんないっしょや」とおっしゃってくださっているような気がします。

1月12日に加賀市の二次避難所で携帯電話を充電したら、無数の着信とメールが届いていました。どうして知ったのかわかりませんが関西や中京地方の方からも届いていました。そのほとんどが、あのとき原発を止めてくれてありがとうという内容でした。あらためて大きな仕事をしたんやなあと思っています。

函蓋相称

法話のページです。「函蓋相称」とは、曇鸞大師が、函（はこ）と蓋（ふた）がぴったり合うように、如来の御心と衆生が出遇っている状態を喩えた言葉。

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり

『歎異抄』第四章

Ito Shunsaku

能美市靜光寺住職
伊藤 俊作 さん

仏教において慈悲とは楽を与え、苦を抜くことを言います。『歎異抄』第四章では、慈悲を聖道門の慈悲と、浄土門の慈悲として教えられます。

●聖道門の慈悲

聖道門とは、聖者となって証果を得るものとなる（入聖得果）。大聖たる仏陀の位に到達し得る道です。自らの能力や努力（自力）によって仏道を実践してゆく、ダメなものを切り捨て、正しい自分であり続ける道とも言えるかもしれません。

人を助けたいと思う心は誰もが持っていることと思います。しかしその思いを自力によって実現していくことはとても難しいことなのです。自力の主体となる私は、どこか都合よく自分本位にみることしかできない。しかも自分を取り巻く環境で、私の善悪の価値観は、いかようにでも変わったり滅したりする。そんな私の価値観を正しいものとしていくと、必ず他の価値観との衝突を生みます。その行き着く先は誰とも生きることのない私です。

私たちは悲しみ育む心も捨てられない、しかしながら私を律し、その人を助け救い遂げることもできない。そんな業縁の中に生きています。自力聖道の慈悲において本当の意味で救い遂げることの難しさがそこにあります。

●浄土門の慈悲

浄土門とは聖者の証じた果中に入る（入聖証果）。つまり阿弥陀仏の本願力（他力）によって、自力の価値観を問われる道です。

「浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて」と述べられます。念仏（浄土の呼び声）を聞き、「まず他でもないあなた自身が救われる身となりなさい」と受け取っています。私たちは都合に合わなければ、自他ともに否定する様な深い自我心を生きています。しかもその自覚がないから、自分の都合の中で出口のない苦悩に埋没します。そうとしか生きることのできない私であればこそ、阿弥陀仏は「浄土に生まれんと欲（おも）へ」と呼びかけるのです。

「浄土はいのちのふるさと」と言われた先生がいます。阿弥陀の浄土は量り比べることのない国です。正解・不正解を問わない世界です。むしろ自分の価値観や、時代の価値観が問われる世界なのです。浄土の願いにふれ、握り締めた私の善悪の手を開かれる。開かれた手にある、いのちそのままを尊いと認められる世界が立脚地となるのです。それは自分の善悪の中では救われていくことも、救い遂げることもできないという徹底的な自覚といえるかもしれません。

●慈悲に聖道・浄土のかわりめあり

本年1月1日に、能登地方を震源とする大地震があったことはご承知のとおりです。小松大聖寺の僧侶を中心としたボランティア団体があります。その一人がよく、「なーもできんよ」と言いながら能登へ向かいます。活動報告には「なんともいえない気持ちになった」、屋内に通水していない方の笑顔に「僕自身歩む力をいただいた」と言っていました。その言葉に頭ではなく身をもって接し自分の力の及ばないことを痛感しているのだと感じます。

ボランティア活動は聖道なのか浄土なのか聞かれることがあります。阿弥陀の本願は何かをしたから善、しなかったら悪といったものではありません。阿弥陀仏の本願は制約ではありません。むしろ自在な人を生むはたらきだと思うのです。頭で論釈し聖道の慈悲と浄土の慈悲を線引きしたところで、それは経典の中での善悪であり知識でしかないように思います。

浄土が正しく、それ以外は間違いであるという、浄土をも握りしめた自分の価値観になってしまう。

痛みを離れたとたんに教えは知識となり智慧を離れ、仏教の教えでさえも自分を正当化する道具になってしまう。阿弥陀の本願は、握りしめた自分の価値観を開き、有限な私たちのいのちの中に無限のいのちを見出す。量ることも比べることもないいのちの大地を立脚地として、量り比べるいのちを生きる。還るべき場所がわからないと私たちは何処へ向かっているのか、今どこにいるのかさえわかりません。その中で右往左往し自分を正当化して生きています。還るべき場所がわかれば、寄り道をしても多少道を外れても還ることができます。

あなたの還るべき場所はここですと、親鸞でいえば法然、法然でいえば善導と、人をわたり念仏となって呼びかけ続ける願いを、浄土の慈悲というのです。

（完）

小松大聖寺教区の能登半島地震に対する支援活動

教区ボランティア団体
炊き出しボランティア南加賀

炊き出しボランティア南加賀　通信 第三号

2024年（令和6年）8月1日発行

私たちは真宗大谷派の南加賀地方の仲間を中心に二〇二四年一月に起ち上げ、炊き出しや片付けの支援ボランティア活動をしております。

皆様からの支援金を有効に使わせていただいております。

先日には採れたての野菜をご提供いただき、他団体さんと共有して炊き出しの食材として使わせていただきました。

ご協力誠にありがとうございます。今後も永く活動を続けていきたいと思いますので、引き続きのご支援をお願いいたします。

【7月度の活動】
7月1～2日：珠洲（炊き出し）
7月9～10日：珠洲（片付け&炊き出し）
7月27日：輪島（予定）
7月30日：珠洲（予定）

炊き出しボランティア南加賀 Facebook QRコード

【五月二十五日　居酒屋】
珠洲市の横山集会所にて、居酒屋炊き出しを行いました。22、23日の居酒屋は屋外でしたが、今回は屋内に場所を設営しました。横山集会所にはあまり炊き出しが来ておらず、是非また来てほしいとのお言葉をいただきました。

食事と飲み物を囲みながらお話されている様子を目の前で見ながらフードメニューを作りました

話し声や笑い声、なによりお顔を見られることが嬉しいと改めて感じました。

【六月五日　片付け】
能登・高山・九州・長浜（当時）教区の有志とともに御寺院の片付けお手伝いに行きました。慶法寺様では倒壊していた玄関屋根、灯籠などの撤去、明楽寺様では倒れた灯籠の撤去作業を行いました。重機を必要とする大変な作業でしたが、造園業の方もおられたことでプロの技術に舌を巻くばかりでした。

（右）大きなものも重機のおかげで運ぶことが出来ました
（左）地震によりずれた墓石も正面に向くよう調整。

教区ボランティア団体
能登応援「僧伽・散華」会

法話冊子
Ａ５版 32ページ　300円

能登半島地震を知ってほしい
能登半島地震を忘れないでほしい

寺院報恩講、お内仏報恩講の施本として、また、お講等で頒布ください。
売上金は教区災害支援活動への寄付金とさせていただきます。

小松大聖寺教区　能登半島地震支援

教区の主な聞法会のご案内

小松大聖寺教務所　常磐会館
（小松市小馬出町26）

聞　法　会

十二日講
毎月12日
●午前9時30分～11時30分

9月	小松市 光玄寺	佐竹 圓修 氏
10月	白山市 松岡寺	波佐谷 聰 氏
11月	加賀市 上宮寺	山本 龍昇 氏
12月	金沢教区 常讃寺	藤場 芳子 氏

日曜講座
毎月第１・第３日曜日
●午前9時30分～11時

9月		
1日	小松市 燈明寺	塚谷 真樹 氏
15日	加賀市 恵照寺	清水　恵 氏
10月		
6日	小松市 興宗寺	但馬 末利花 氏
20日		未定
11月		
3日	小松市 真入寺	長崎 正信 氏
17日	小松市 光玄寺	佐竹　融 氏
12月		
1日	加賀市 燈明寺	冨樫 誓子 氏
15日	小松市 淨誓寺	中谷　寧 氏

大聖寺教務支所 常葉会館
（加賀市大菅波町フ8-1）

聞　法　会

示談講
隔月20日前後
●午後1時30分～3時30分

9月24日(火)	
加賀市 毫攝寺	出雲路 雅 氏
12月23日(月)	
小松市 光玄寺	佐竹　融 氏

小松大聖寺教区のお知らせは
ホームページもご覧ください

表紙は小松市園町來生寺住職藤秀悟さんの作品です。藤さんは、視覚的に真宗の教えを伝える作品を数々制作されています。來生寺にはその他の作品が展示してあります。

編集だより

▼本山を身近に感じていただきたく真宗本廟奉仕団に参加された方の声を掲載しました。本山に一度も行ったことがない方や行ったことのある方もお参りだけでは得られない体験があると思います。奉仕団の参加を検討されておられる方の参考になれば幸いです。

▼能登半島地震が起きてから半年を過ぎても、未だ再建のめども立っていないお寺が多くあるのが現状です。被災された寺院のご住職のお話から、過酷な現実を知らされます。

▼地震は悲しみと恐れと苦しみをもたらしましたが、私たちはこの困難から何を学び、何を感じ、何を残していくのか。未来に向けて歩み出そうとする思いに真宗の教えが支えになればと願います。（N）